

様式(10)

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 保 乙 保	第 35 号	氏 名	齊藤 泉
審査委員	主 査 岩本 里織 副 査 葉久 真理 副 査 森 健治			

題 目

Persistent headache during the cerebral vasospasm period following radical treatment of ruptured cerebral aneurysm

(破裂脳動脈瘤の根治術後のスパズム期においても持続する頭痛)

著 者

Izumi Saito, Maki Zenke, Natsue Nozaki, Yasuko Yokoi, Takako Miagawa, Ayako Tamura  
2018 年 12 月発行 Journal of Japanese Academy of Neuroscience Nursing Vol.5, No.1,  
3~10 ページに掲載済

要 旨

本研究の目的は、先行研究において未だ解明されていない破裂脳動脈瘤の根治治療後のスパズム期(4~14 日目)においても持続する頭痛について、その実態と要因を明らかにすることであつた。対象者は、stroke care unit(SCU) の治療施設を備えた二施設で、該当患者は 494 名の内、破裂脳動脈瘤発症後 72 時間以内に脳動脈瘤の根治術を実施したスパズムのない患者は 134 名を得た。調査対象は、母集団を代表する年齢、性別、脳動脈瘤の発症部位であつた。破裂脳動脈瘤の根治治療後のスパズム期の痛みは、73%が訴え、その部位はすべて頭部であつた。頭痛の程度は、比較的強い痛みで、持続期間は 2~9 日(中央値 4 日)で、頭痛緩和方法は、臨時投与が 76.5%であつた。頭痛の有無により 2 群に分け、頭痛に関連する要因の比較を行った。有意の差を認めた項目は根治治療別のみで、血管内治療を行った患者は直達手術による患者より頭痛の訴えが多い傾向を示した。重度の頭痛群の頭痛持続期間は 9 日と有意に長く、鎮痛薬投与回数も 11 回と有意に多かった。本研究は、徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会において承認を得て実施した(承認番号 3089-1)。

以上の内容は、破裂脳動脈瘤の発症直後の激しい頭痛に続く根治術後のスパズム期において持続した頭痛の存在を明らかにし、スパズム期における頭痛に対する看護支援の必要性を示唆した。今後の破裂脳動脈瘤患者のスパズム期の頭痛緩和手法への基礎的資料を提供することと患者の療養における quality of life (QOL) の向上に寄与することが期待でき、その社会的意義は大きく博士の学位授与に値すると判定した。